

<書評論文>

フロイトのセクシュアリティ論の射程

Phillippe Van Haute & Tomas Geyskens,
Confusion of Tongues: The Primacy of Sexuality in Freud,
Ferenczi, Laplanche.
(Other Press LLC, 2004)

古 川 直 子

1. はじめに

オランダのナイメーヘン大学で教鞭をとる2人の精神分析家Philippe Van Hauteと、Tomas Geyskensの共著⁽¹⁾である本書は、S・フロイトの精神分析を、神経症や倒錯のような「病理」にのみ関わる「精神病理学」としてではなく、人間一般に見られる現象を解明するための考察である「臨床人間学」(clinical anthropology)として読むことを主眼とする。著者らの提唱する「臨床人間学」の基礎となるのは、あらゆる人間に共通する現象を扱うための、「正常と異常の連続性」という前提であり、また「精神分析におけるセクシュアリティの中心性」を維持すること、「子供と大人の根本的な非対称性」を考察の根本に据えるという3つの原則である。幼児性欲を大人のセクシュアリティとは異なる性質(「非性器的」「倒錯的」)によって特徴づけ、セクシュアリティを人間の発達における決定的な葛藤の場として捉えたフロイトの洞察を生かすために、著者らは子供と大人の世界の根本的な断絶という前提が必要であると考えている。それはすなわち、子供から大人へという発達によってスムーズに解消される程度の差異ではなく、発達によって容易に乗り越えられない断絶を設定するということである。本書のタイトルである“Confusion of Tongues”は、これを表現するS・フェレンツィの用語⁽²⁾から取られている。タイトルに「セクシ

⁽¹⁾ 第1章はGeyskens, Tが精神分析の国際誌 *International Journal of Psychoanalysis* に2001年に寄稿した論文がほぼそのまま転載されているが、他の章は両者の執筆した箇所が明示的に分けられてはいない。

⁽²⁾ 直訳すると「言語の混乱」であるが、S・フェレンツィは大人と子供の世界の異質性をバベルの

ュアリティの中心性」とあるように、著者らの提唱する「臨床人間学」とは、セクシュアリティを基軸とする人間についての知として精神分析を読解することである。順調な発達が阻害される場としてのセクシュアリティが精神分析の中心に据えられるのであれば、医師としてのフロイトが対象とした精神疾患は一部の病者のみならず、セクシュアリティを有する人間すべてに起こりうることになり、正常／病理の境界は曖昧になると著者らは見る。

精神分析における「性的なもの」が、いかなる意義と位置づけを持つのかという問いの重要性に比して、これが考察の主題として取り上げられることはさほど多くない。すなわち、我々が通常「性」と呼ぶものを精神分析的に説明するというにとどまらず、我々の「性」の概念に大きな変更を加えることで、人間の生を根源的に規定する局面としてセクシュアリティを捉えることを可能にした、精神分析における思考の1つの線が十分に論じられてきたとは言いがたい。また、この作業を続けてきた中心的な論者であるJ・ラブランシュのセクシュアリティ論に対する正当な評価⁽³⁾という仕事もいまだ残されている。本書の意義はこのような状況のもとで理解される。すなわち、その意義は、幼児性欲の概念がフロイトのセクシュアリティ論に占める位置付けの変化（とそれに伴うセクシュアリティ論自体の変容）を検討し、また「臨床人間学」としての精神分析から得られる「セクシュアリティの中心性」という論点が、他の2人の優れたフロイトの読み手によってどう引き継がれたのかという問いを立てたことにある。

本書は、前半の1・2章でフロイトのセクシュアリティ概念の誕生と変遷を追い、後半の3・4章でS・フェレンツィとJ・ラブランシュという2人の思想家を扱う、という構成になっている。著者らは精神病理学から「臨床人間学」への移行点として、フロイト自身による誘惑理論の放棄を取り上げる。幼児期における誘惑の経験を精神病理と結びつけている限りでは、幼児性欲は外部から持ち込まれた病理的現象であるにすぎなかった。だが誘惑理論の放棄によって、倒錯的な性質をもつ幼児性欲が、すべての人間に内在する生物学的な特徴として発見されることで事態は一変する。後半の章で主題となる2人の議論は、後期フロイトの生物学主義を逃れつつ、幼児性欲についての初期の洞察を生かす試みである。

塔の崩壊後に人々が互いの言葉を理解できなくなった事態になぞらえて説明した。

⁽³⁾ レズビアン／ゲイ・スタディーズ、クィア理論と呼ばれる潮流に属する論者たちにとって、フロイトのセクシュアリティ論は関心の対象であり続けてきたが、ラブランシュによるフロイト読解の重要性は主として彼らによって明らかにされてきた。Bersani, L (1986)、Lauretis, D. T (1994)、Silverman, K (1992)、Dean, T (2000) 等を参照。

2. 内容紹介

2. 1 誘惑から性の生物学へ

まず第1章では、フロイトの1892年～95年の神経衰弱の研究から、セクシュアリティがしだいに考察の前面へと浮上してくるさまを見てゆく。読解の対象は主にW・フリースへの手紙⁽⁴⁾である。19世紀末、よく知られる病であった神経衰弱について性は要因の一つに数えられていたが、神経症の原因を性に限定したのはフロイトの創見であった。彼は一般的な神経衰弱から「不安神経症」を独立させ、性的病因説をこの病の研究から進めてゆく。なぜ「不安」なのか？フロイトによれば不安は身体に（性的な）興奮が蓄積した結果であり、神経症の不安は変形された性的リビドーである。この時期のフロイトのセクシュアリティ概念について特筆すべきは、心的領域で解放できない性的興奮が身体に蓄積されると不安神経症を引き起こすというように、身体的な緊張と心理的な欲望との乖離という観点から理解されていた点であると著者らは指摘する。

1895年～97年に彼は、ヒステリー、強迫神経症、パラノイアについても同様に研究を進めるのであるが、これらは苦痛な記憶に対する病理的防衛という新たな心理的側面をもつ。原因としての性は幼児期における性的な経験の記憶に絞られるが、これらの病においては実際に起こった出来事そのものよりも、後にその記憶が甦ったときに強い情動を生み出すという事後性（Nachträglichkeit）が観察される。この事後性に対して、幼児期にはまだセクシュアリティが存在せず、性を理解することが不可能であるために、大人から性的な誘惑を受けることがトラウマとなり、後に精神病理を引き起こすという誘惑理論による説明がなされたのであった。性的な出来事のみが（思春期をはさんで）事後的に、出来事の記憶というかたちで強い情動を生み出しうるという、事後性とセクシュアリティの結びつきは誘惑理論の核となるが、ここでは幼児期にセクシュアリティが存在しないこと（幼児性欲の不在）が前提になっていた。1896年12月6日の手紙⁽⁵⁾で、フロイトは誘惑理論を倒錯と結びつける。すなわち、後にトラウマとなる誘惑には、大人が子供と性的な接触を行うというだけでなく、誘惑者の関心が子供の性器に限定されていないという点において倒錯の性質が見られると考えるようになったのである。こうして子供にも性的な快が存在することを、誘惑が倒錯的＝非性器的であることから説明できるようになった。幼児性欲

⁽⁴⁾ 1887年から1904年にかけてフロイトはベルリンの耳鼻医である友人、W・フリースと文通をおこなっていた。

⁽⁵⁾ Masson (1985 = 2001 : 216)

は誘惑理論が放棄された後に、それに代わるものとして登場したのではなく、倒錯的な幼児性欲の発見と誘惑への倒錯の導入が結び付いていることに著者らは着目する。

しかしこれは誘惑理論の前提たる幼児性欲の不在と抵触することになり、フロイトは、1897年9月21日の手紙⁽⁶⁾で誘惑理論を放棄し、器質性抑圧（器質的抑圧）という生物学的な議論によって幼児性欲の説明を試みるようになる。すなわち、幼児においては口唇や肛門は性的快感の源泉であるが、それらは成長とともに棄てられ、正常な大人ではこれらの部分が性的な興奮を引き起こすことはない。動物においては口唇や肛門が性的な快感の源泉であり、その匂いが性的興奮を生むが、人間には逆に嫌悪を引き起こす。嫌悪は常に抑圧された性的快楽の記憶に対する反動として生まれ、「性の正常な抑圧」として道徳・羞恥心などの源泉となる。この議論によれば、ヒステリーや強迫神経症等の精神病理はすべての人間が持つこの感情が極端なかたちで表れたものであり、正常／病理の厳密な区分は不可能になる。このような誘惑理論の放棄後、器質性や生物学への奇妙な言及⁽⁷⁾が幼児性欲の概念を理解するうえで決定的になったと著者らは言う。

2. 2 「性理論三篇」における臨床人間学

第1章では、誘惑理論から生物学的な幼児性欲への移行が、人間一般を対象とする臨床人間学を可能にしたことを見た。第2章で読解の対象となるのは「性理論三篇」である。このテキストは1905年に第一版が出されたのち、改訂のたびにフロイト自身が20年にわたって新しい部分を加えていったという点で特異である。これによって「性理論三篇」はフロイト自身にとって重要なテキストであったというだけでなく、我々にとっても彼の思考の変遷を見るのに適した素材になっている。この章で著者らは、まず初期の版において幼児性欲と大人のセクシュアリティの関係がどのように捉えられていたのかを確認し、後期フロイトの改訂によって何が失われたのかを論じてゆく。

「性理論三篇」においてフロイトは、人間のセクシュアリティがその「通俗的」理解によって捉えられているほどには単純な事態ではないことを主張し、「性的倒錯」から論を始めている。倒錯は「対象に対する逸脱」（同性愛、「性的に未熟な子供や動物を対象とする倒錯」と「目標に対する逸脱」（フェティシズム、サドマゾヒズム）に分けられるのだが、この倒錯論から著者たちは以下のような主張を引き出す。すなわち、フロイトにとっ

⁽⁶⁾ Masson (1985 = 2001 : 274)

⁽⁷⁾ たとえば、幼児性欲は身体に「器質的に」刷り込まれており、幼児期に見聞きしたものが後の夢・幻想・神経症の生物学的な起源である、というような議論を指す。

て倒錯的要素を全く含まない正常なセクシュアリティというものは存在せず、病理としての倒錯は欲動が異性愛的な性交から完全に独立し、何の関係ももたなくなったときに初めて生じる。すべての人に倒錯への傾向が存在し、社会や文化に関わらず正常と病理を厳密に区分するセクシュアリティのノルムが存在するわけではない。大人のセクシュアリティは性器優位のもとにあるが、それはまた口唇や肛門などの「倒錯した」性感帯から生じる部分欲動の混合でもあり、同時に同性愛的・異性愛的という対象選択の葛藤をも含みこんでいる。

人間のセクシュアリティは、幼児期に倒錯として生じたというその起源と、文化または性器的セクシュアリティの要請とのあいだの葛藤によって形成されている。精神分析から見た人間と動物の差異とは、動物においては発達の初期の段階が後の段階へと完全に取り込まれていくのに対し、人間において初期の段階が（つまり幼児期の倒錯的セクシュアリティが）発達によって後の段階に完全に統一されることはない（大人の性器的セクシュアリティが幼児期の倒錯的要素を完全に取り去ることはない）ために、人間はつねに不調和な（out of joint）存在であり続けるということなのだ、と。こうしてセクシュアリティが不調和の場であるからこそ精神分析において中心的な位置を占めると著者らは考える。

また、フロイトが幼児性欲の範型としたおしゃぶりの例に見られるように、幼児性欲は自身の身体のほかに対象をもたないという自体愛的性質をもつ。著者らによれば、このような外界の対象を参照しない段階にある幼児に対して、大人による誘惑は外部の対象を持ち込んでしまう。このために幼児期の誘惑はトラウマ的なのである。

だが、この倒錯的で自体愛的な幼児性欲の性質は、「性理論三篇」の1915年以降の版で、エディプス・コンプレックスと幼児性欲の段階図式（口唇期／肛門期／男根期）の導入にともなって軽視されるようになる。またこの図式の導入によって、子供から大人への成長は諸段階をへて異性愛関係に収束する連続的なモデルで捉えられるようになってしまうというのが著者らの評価である。

2. 3 生物学主義批判としてのトラウマ／誘惑理論

前半の2章を受け、後期フロイトの生物学主義をトラウマや誘惑の理論を再構築することで相対化しようとした思想家、S・フェレンツィ、J・ラブランシュが本書の後半のテーマである。第3章「トラウマの回帰と後期フェレンツィの仕事」では、フロイトの初期の同僚の一人であったS・フェレンツィ⁽⁸⁾のトラウマ論が紹介される。1920年代、系統発

⁽⁸⁾ S・フェレンツィ（1873～1933）は、ハンガリーの精神分析家であり、精神分析療法を実践した。

生やエディプス・コンプレックスに関心が向いていたフロイトと意見が分かれたフェレンツィは独自のトラウマ論を展開した。フェレンツィにとって重要であったのは子供と大人の世界の根源的な差異である。子供は「優しさの言語」によって構成される世界に生き、大人の「情熱の言語」を解さない。大人が子供の「優しさの言語」を自身の言語で解釈し、子供の世界には存在しない「情熱の言語」によって応えてしまったときに、子供ははじめて性に遭遇し、それがトラウマとなる。これが「言語の混乱」⁽⁹⁾と呼ばれる両者の世界の断絶である。

第4章「ジャン・ラブランシュと誘惑の一般理論」のテーマであるJ・ラブランシュ⁽¹⁰⁾の理論はこのトラウマ論を受けて、世界を構成するのはフェレンツィが主張するような言語のみならず、しぐさや視線なども含む、さまざまな種類のメッセージであるとする。彼によれば、これらのメッセージは受け手である子供にとって意味を十全に解読できない「謎」であるが、送り手である大人にとっても十分に意識化できない意味を含んでいるという点でまた同様である。こうして、大人と子供の断絶論は「謎のメッセージ」の挿入によって変形される。フロイトの誘惑理論において誘惑者は倒錯した父親であったが、ラブランシュはその背後に世話をする母親の誘惑をおき、これをより一般的な大人による誘惑にまで広げることで、「子供が大人の世界と遭遇する」という出来事を誘惑によって記述する（「誘惑の一般理論」）。大人が無意識に性的な「謎」に満ちたメッセージを子供に伝えてしまうことが、原初の「誘惑」なのである。ラブランシュにおいては、誘惑の一般化によって子供と大人の世界の根本的な差異、そして正常と病理の連続性という洞察は維持されるが、それ自体、性的なものに限定されない「謎」が中心化されることによって、「臨床人間学」の基礎たるセクシュアリティの中心性は失われたと著者らは批判する。

3. 考察

本書の論述においてJ・ラブランシュが占める比重は、構成から一見して受ける印象よりも、ずっと大きい。前半の2章で提示される読解の大枠（「誘惑理論の放棄から生物学的基礎づけへ」）をラブランシュに負っているうえに、フェレンツィについての第3章は、ラブランシュを扱う次章への準備作業として位置づけられるからである。また、著者らがフロイトのセクシュアリティ論の理解に不可欠な点として挙げる論点（初期フロイトにお

⁽⁹⁾ Freud (1939 = 2000)

⁽¹⁰⁾ J・ラブランシュ (1924～) は、主に『精神分析用語辞典』(1967 = 1977、みすず書房)の編者として日本でも知られており、『幻想の起源』(1985 = 1996、法政大学出版局)等の翻訳がある。

ける不安とセクシュアリティの関連をはじめ、誘惑の倒錯的性質と幼児性欲の発見、「事後性」「器官性抑圧」の概念等）は、既にラプランシュによって指摘されていたものであり、第1章での読解はラプランシュの講義録の簡潔な要約になっている。しかし、このようなラプランシュからの影響にもかかわらず、本書においてはラプランシュの考察の中心＝精神分析によるセクシュアリティ概念の特異性が見落とされている。これは特に第2章でのフロイトの倒錯論の解釈や、第4章でなされるラプランシュの議論の紹介とそれに対する著者らの評価において明らかになる。

それでは精神分析固有の領野としてのセクシュアリティとは何か、前節で極めて簡単にまとめた第4章の内容紹介も兼ねて、ラプランシュの読解に従って見てゆこう。おしゃぶりの例で示された議論によれば、セクシュアリティは最初、予め定められた対象（たとえばミルクのような、栄養摂取という目的に適う食物）をもつ本能（自己保存欲動）と混じり合っている。この自己保存欲動がその固有の対象から切り離されたときに、セクシュアリティはそれとして独立する。「(母親の) 乳を吸う」→「自分の指をしゃぶる」(自体愛) という移行において、欲動はミルクから(母親の) 乳房へ、また乳を吸うときに似た刺激を口唇に与えてくれる自分の指ないしは身体他の部分へと対象を変更するわけだが、このセクシュアリティの誕生段階において、欲動の対象には(「自体愛」という呼び名が示すような) 自分の身体のみならず、しゃぶることのできるものすべてが含まれる⁽¹¹⁾。こうして欲動はその固有の対象から離れてゆくのだが、ラプランシュはこの「離陸」を大人による世話という「誘惑」によって説明する。愛撫し、食物を与え、世話をする母親のしぐさ、眼差しから、子供は自分に向けられてはいるものの読解不可能な「謎」を含んだメッセージを受け取ることで「誘惑」され、ここでセクシュアリティが生まれるというのである。

では、このような説明と、著者らの理解ではどこが異なっているのだろうか。一般に、動物とは異なる人間特有のセクシュアリティは、言語や文化の存在によって理解されている。すなわち、人間に生殖機能が備わっている以上、動物とパラレルに理解されるような生物学的基盤が存在することは否定できないが、生殖から逸脱する多様な性もまた存在しており、この多様性は言語や文化・社会の存在によって生じるのだ、と。著者らも基本的にこの枠組みに依拠しながら、ここに発達のズレという「臨床人間学」的観点を付け加えている。この図式で説明すべき事象として設定されているのは、生殖から逸脱するセクシ

⁽¹¹⁾ さらに「しゃぶる」という行為そのもの、さらに口からものを取り込むという形象自体がセクシュアリティにおいては対象となりうるとされる。

ュアリティ（「人間の多様な性」）である。しかし、フロイト＝ラプランスの場合には逆に、なぜ人間にも動物の交尾との類比において理解できるような現象（生殖につながりうる異性愛性交）が見られるのかを問う。フロイト＝ラプランスは、生殖機能の存在を「セクシュアリティの生物学的（生理学的）基盤」へと一足飛びに結びつける⁽¹²⁾ことをしない。先の一般的な理解で受け入れられていた前提、「生殖機能を備えているから、その機能に由来する快楽／欲望が存在するはずだ」という理解そのものを再考するのである。このような問いの立て方を可能にしたのが、先述したような「幼児性欲」の研究である。「性的」と呼ばざるをえないような快楽／欲望が、生殖機能の備わっていない幼児に存在するとき、それらは生殖機能からの「逸脱」である。さらに、おしゃぶりの事例に示されていたように、摂食という生体機能に付随して生じた快楽が、その機能の固有の対象（ミルク、食物）とは無関係に追求されはじめることがセクシュアリティの誕生であった。この幼児の段階まででいえるのは、人間にあらかじめプログラムされた機能（摂食、排泄、生殖etc）からの「逸脱」がセクシュアリティであるということである。成人の場合、食欲・排泄欲求と同様の生殖欲求＝本能という想定をひとまず受け入れるとしても、この想定と人間が生殖行為を行うという事実をダイレクトに結びつけることはできない。というのも、人間には、生殖機能の成熟にかかる長い期間中、機能からの「逸脱」として享受されてきた快楽／欲望⁽¹³⁾が存在するからである。生殖機能が完成したとき、その機能を備えた身体器官はすでに生殖とは関係のない快楽／欲望によって流用されている。この生殖機能特有のタイミングの悪さに着目するフロイト＝ラプランスにとって、人間の生殖行為は「機能からの逸脱として誕生したセクシュアリティが、生殖という機能に奉仕するようなものにもなりうる」ことを示す、驚くべき現象である⁽¹⁴⁾。

著者らは第2章で、幼児性欲と大人の性器的セクシュアリティの葛藤が人間特有の病理の原因であると捉えていたが、ここでは「性器的」＝生殖機能に由来する欲求が、幼児性欲とは別個のものとして当然のように導入されている。この図式では、人間の生殖行為が、生殖機能に由来する欲求＝性器的セクシュアリティの表出として直接的に理解される。フロイト＝ラプランスが説明すべきものとして設定する人間の生殖行為という現象が、著者らにとっては別の事象を説明するための前提として使えるほどに自明なのである。ここで説明の方向が逆転していることが、第4章でのラプランスの評価にも

⁽¹²⁾ 著者らは、生殖機能を備えた身体をセクシュアリティの生物学的基盤としたうえで、「しかしセクシュアリティは『生物学的基盤』によって完全に規定されるわけではない」と付け加える（本書、p.106-108）。

⁽¹³⁾ これは先述したように生殖器に限定されるものではないが、生殖器に生じる反応も含んでいる。

⁽¹⁴⁾ 本能でないものが本能に見えるように働いているという意味で、ラプランスはこれを「本能の擬態」（l'instinct mimé）と呼ぶ（Laplanche 2006: 30）。

影響している⁽¹⁵⁾。

著者らの誤読が生産的ではないと考えられる理由は次の二つである。まず、フロイト＝ラブランシュは、往々にして混同されがちだが、実は異なる水準にある問題系を慎重に分離した。この意義を著者らは理解していない。つまり、「人間は生殖機能を備えている」、「人間は生殖行為を行う」という観察可能な事実の水準と、その事実間の背後にあるメカニズムについての推測（「生殖機能に由来する快楽／欲望が、人間を生殖行為に至らせる」等々）の水準を、著者らは再び混同するのである。次に、事実間の背後にあるメカニズムの推測について。著者らの議論のような方向性をとると、生殖から逸脱する膨大な「倒錯」を逐一説明していかなければならない。フロイト＝ラブランシュのように、生殖行為の背後にあらかじめ複雑なメカニズムを想定しておくことで、人間の多様な性現象（諸々の「倒錯」）をシンプルに記述でき、また議論の射程を（生殖に限らず）生体機能とそこからのズレというかたちで、人間の生全体にまで広げることができる。

著者らが正当にも提起した「セクシュアリティの中心性」という視座は、著者らの「セクシュアリティ」理解の内実を大幅に変更してはじめて、その本来のポテンシャルを取り戻すのである。

【文献】

- Bersani, Leo, 1986, *The Freudian Body: Psychoanalysis and Art*, Columbia University Press. (=1999, 長原豊訳、『フロイトの身体』、青土社)
- Dean, Tim, 2000, *Beyond Sexuality*, University of Chicago Press.
- Lauretis, de Teresa, 1994 *The Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire*, Indiana University Press.
- Laplanche, Jean, 2006, *Problématiques VII: Le fourvoiement biologisant de la sexualité chez Freud suivi de Biologisme et Biologie*, Presses Universitaires de France.
- Masson, J.M. ed., 1985, *The Complete Letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess, 1887-1904*, Harvard University Press.
- (= 2001, 河田晃訳、『フロイト フリースへの手紙:1887-1904』、誠信書房)
- Silverman, Kaja 1992, *Male Subjectivity at the Margin*, Routledge.
- S・フェレンツイ、森茂起訳、1939=2000、「子供と大人の間の言語の混乱」、「心の危機と臨床の知」vol.1

⁽¹⁵⁾ 著者らは、「謎」が性的なものに限定されないために、ラブランシュによる「謎」の図式では「セクシュアリティの中心性」が失われたと批判する。著者らが「謎」として理解するのは、たとえば妊娠した母親・両親の抱擁である。これらの光景は、子供にはまだ理解できない性的な意味合いのメッセージを伝達してしまうことで、子供をセクシュアリティに遭遇させる「誘惑」となりうると著者らは説明する。ここでの「性的」という表現が生殖や性器との関わりにおいて把握されていることは明らかだが、たしかにすべての「謎」がこの意味で「性的」だとは限らない。しかし、「生体機能からの逸脱」としてのセクシュアリティ概念を踏まえたうえで、ラブランシュが導入する「謎」は、当然ながら生殖や性器との関連を示唆するから性的なのではない。「謎」は、生体機能からのセクシュアリティの離脱（「逸脱」）を誘い出すからこそ性的だとされるのである。

S・フロイト、中山元編訳、1997、『エロス論集』、ちくま書房

(ふるかわ なおこ・修士課程)